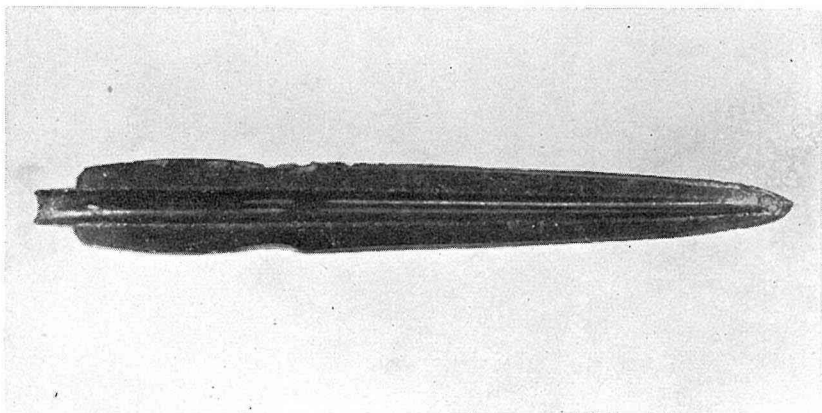
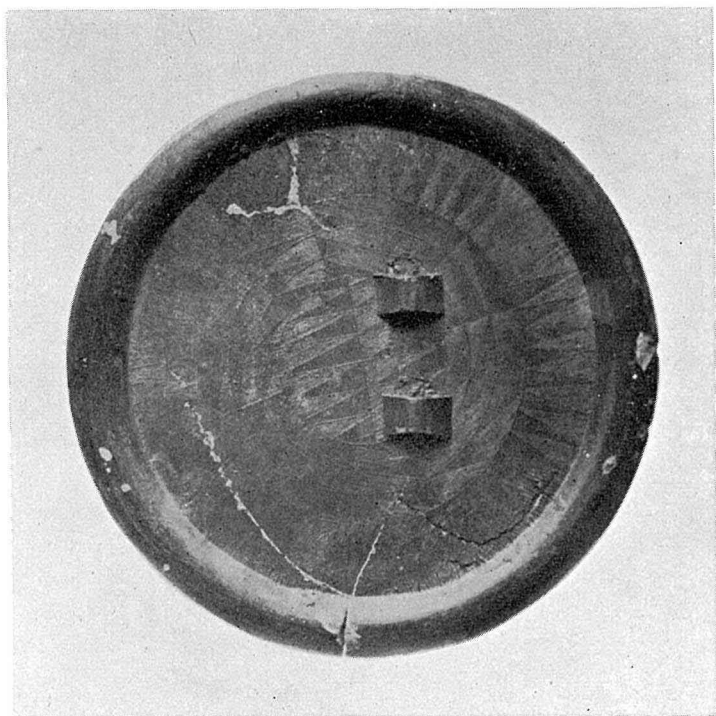


金元龍・韓国江原道襄陽郡出土細形銅劍・細文鏡について 付録図版

銅
劍



細
文
鏡



韓国江原道襄陽郡出土細形銅劍

細文鏡について

金 元 龍

一

一九六六年七月初旬、ソール大学の一守衛が細形銅劍・細文鏡各一個、および高麗時代の銅鉢一、匙箸破片などを学校の博物館に持ってきた、鑑定を依頼した。話しによれば、これらの遺物は、

江原道の東海岸、東草市東明洞居住の金といふ人が、地雷探知器で古鉄採集中、東草附近で掘り出したものであり、東草市の北、約一六kmにあたる小さな村の裏山から出たといふ。この地点で探知器の反応があったので、その地点を掘棒で突いた所、地表直下に、穴がポツカリ開き、銅劍、細文鏡はその穴の中から出土したといふ。筆者は、遺物は博物館で購入することにし、その価格を提示した上、詳細な出土地名と出土状況を手紙で問合せるやうに頼み、併せて実査の希望を申し出た。しかし数日後この守衛が来

て、発見者の金といふ人は船乗りで目下出漁中の為詳細は分らない。ただ出土地点は東草の北でなく南であり、小川のほとりで水に浸ったまま出たといふ。どこまで本当であるのか全くわからない。とにかくその金といふ人の家を訪ねることにし、八月の炎暑を冒して東草に出かけていった。行ってみると彼は家に居るのであるが、言ふことに辻褄が合はず、何らかの事情で確かな出土地点を隠さうとしてゐることは確かである。

そして筆者のたつての頼みに負けて、自ら案内した所は、東草の南の小高い松山の中腹で、ここだと指さす地点をみると、高麗時代の小さな墓が破壊された痕で高麗磁器片が散乱してゐる。これは守衛が持ってきた、もう一つの遺物群、すなはち高麗銅鉢類の出土地点であつて、銅劍、細文鏡のたところではない。遙々やってきた筆者は怒り心頭に発し、警察に告発するとまでいって

みたが、この若者はつひに動かず、地名も明らかにしない。そして今度は銅劍と銅鏡を分離し、その中の一つは東草市の北方で他人が掘りだしたといふのである。何如ともなすすべがない。筆者は空しく帰ってくる他はなかった。初めこれらの遺物が学校にもたらされた時、我々は相당한高価でそれを買うことにし、現品は博物館で保管することにした。我々が尠に正当な価格を申し込めたのがあやまりであったと考へられる。

二

東草 (Sok-chu) は襄陽の北約十六 km にあたる漁港であり近來急に發展して市に昇格された町である。問題の劍・鏡は此の市の北方で出たことは疑いなしと思はれ、一番最初に聞いた時に東草の北四里 (十六 km) ばかり、乗合バスで略一時間走り路傍の村の裏山であったといふ所を見ると、行政地域上では江原道襄陽郡土城面内のどこか海岸近い丘陵面であったと見られるのである。從來、銅劍類の中で土城址と関連して出土する例が少くないのを思ふと、この土城面内の城釜里かとも考へられるが、これは山手に大分入って居るので、どうかと思ふ。さてこのあたりから、さらに北方約十 km の地点にあたる高城郡杆城面海岸からは、銅鍔鍔範が発見されて居り、そのさらに北、十 km 以内である同郡巨津面巨津

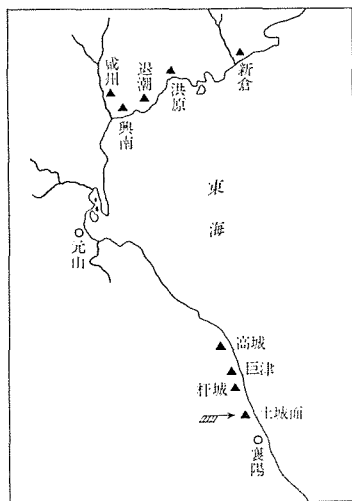


図1 青銅器発見遺跡

里では、銅劍の鍔範が、また、その北方約四〇 km 位の同郡外金剛面沙坪里では、細形銅劍が出て居って、後述の如く北方、咸鏡南道一帯の銅製品遺蹟群に連って居り、このたびの発見品は、いはばこの東海岸を南下する青銅製品遺蹟群の最南端に当るといへるのである。こういうふ点で今回の発見は有意義であり、数少ない細文鏡に完好な一例を加へて貴重であった。韓国動亂後、過去の戰場を探しまはって、地雷探知器を以て地下の弾皮、古鉄などを掘り出す者が出て来たが、こういった探知器によって銅劍類が出て来たのは奇であり、彼等は古鉄採集と同時に考古学的リコネサンスをもやっけて居るわけである。今年の春にも同じ方法で大きな高麗銅鐘が発見されてゐるのである。

却説、問題の鏡・劍の確実な出土地点も、その出土状態も以上のやうに不明であるが出土状態については一番最初に「鉄棒で地面を突刺して見たところ大きな穴がポッカリあきその中に鏡と劍があった」と言った守衛の言葉が真実であると信ぜられ、天井石のある石廬墓か又は甕棺ではなかったかと考へられるが、何しろ当の本人が一切口を開かぬので何とも致し難い。唯、彼等の用いてゐる探知器は、小形金属品の場合に於ては、有効深度一米を越し得ないと云はれるものであるから、問題の鏡・劍は地表下一

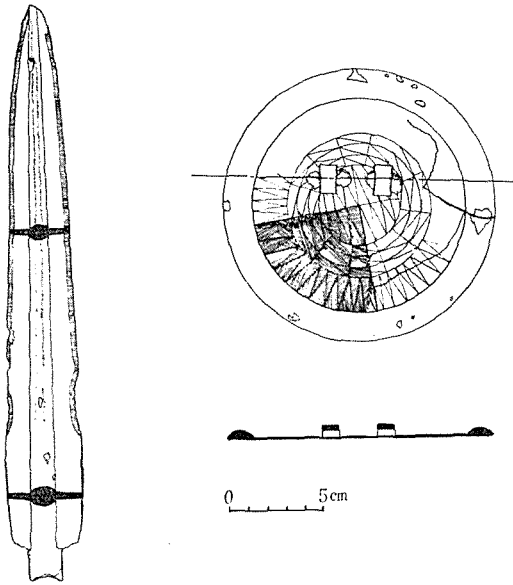


図2 銅劍・細文鏡実測図

米以内の深さにあったと信ぜられる。

三

さて細形銅劍は、一部刃こぼれがある外は鋒より茎部迄保存状態の良好な完全品であり、全長三〇・四cm、今全面光沢ある黒錆に覆はれ鋒部片面に緑錆が一点あるのみである。劍心に銅劍特有の稜がなく鑄造後に刃をつけるために使った鑢が当って二条の縦線を作つてゐるだけである。刃付けは鋒から一九・五cmの所迄でその直ぐ下に同じく鑢で軽く内彎する扶込みを作つて居りそれから下部は鑢をあててはゐるが角度が非常に急で此は刃をつけるためではなく却つてそれを殺すためになされたものである。唯この部分が外方に少しく膨みを見せながら茎部に向つて軽く狭つてゐる点は、後述することく古式の伝統を示して居り、劍全体の形は『朝鮮古文化綜鑑』第一巻図版三六所収の第一六九号劍と全く同じである。この劍は長さ三二・四cmで、襄陽のそれよりも丁度二cm長いけれども咸南北青郡土城里の出土で後述することく共に同じ東海岸圏に属してゐて興味深いのである。

一方、細文鏡は直径一四・三cmで小鹿島出土鏡(一四・四五cm)とほぼ同大である。いま鏡の一半に亀裂を生じ、一部黒錆の剥がれた所があるが、ほぼ完好で鏡面の光沢ある黒錆は殊に美しい。

鏡面は反りのない扁平面であり、綺麗に磨がかれてつやつやして居る。鏡背には蒲鉾縁に囲まれて中心より稍上方に二個の帯状鈕が並んでゐるが、後述するように古式の粗文鏡（『古文化綜鑑』第一巻図版四三）とか平南孟山出土の鎔範（同上書図版四四）では鈕孔が範に彫られた相連る同一の溝で以て作られ出来上りの鏡を見ると鈕間とか鈕のまはりには文様がなくなりそのあたりが何となくゴタついてゐるが、この襄陽鏡では例へば平南反川里出土の精文鏡と同じく鈕孔が個別的に工作されて居り、無文の面積が最小限度に縮小されてゐる。それだけ精文鏡が粗文鏡より技術が発展してゐるのである。

さて本鏡の施文区を見るに大体三個の文様区に分けられる。即ち外方より始めて鋸歯文よりなる外区、次が対角線にて二分された長方形よりなる三つの同心円、そして真中の内区が径四cmの円になって居りこれも亦対角線にて二分される長方形からなつてゐる。これらの文様は細くて浅い、而し明確な線よりなつて居り鑄範の良さを物語つてゐるが鏡縁近い一部の鋸歯文が疎らで粗い線よりなつてゐるのや一部ブツブツがあるのは鑄範の損傷と彫り直しを示してゐる如くである。さてこの文様及双鈕の形式は反川里出土の二例（『古文化綜鑑』第一巻図版一九）に酷似して細部に一部差異を見せてゐる。即ち反川里の二例は共に文様区が鋸歯文、

同心円、中心円の三区より成り立つてゐる点は同じであるが一例は中心円の外方に斜交線帯と鋸歯文帯を廻らせて居り他の一例は外区と中区との間に平行集線文帯が入つてゐるのである。然しながら襄陽鏡がこの反川里鏡と同形式に入るべきことは明らかであり其他の粗線文鏡とは自ら区別されるべきである。なお慶北月城郡入室里出土の細文鏡も現在残つて居る部分から推すとこの反川里式と同式であるが中区の同心円が四つになつて襄陽鏡よりは一つ多くなつて居る。後で又触れるであらうが、こういう風に各地発見の鏡、劍類が形式的に相似を見せながら同一品のない事実がこれら鏡、劍が或る特定地とか工場で作られたのでなく各地で、少くとも広い地域で個別的に鑄造されたことを物語つて居ると思はれる。こういった点は韓国青銅器文化の実相理解に一つの示唆を与へるものと言へやう。

四

私は嘗て韓国出土の細形銅劍の祖型は所謂滿洲式銅劍であり滿洲式銅劍の最も古い形式が朝陽十二台菅子のそれであると指摘したことがありその後同じやうな理論が北朝鮮からも出た。さて滿洲式銅劍の特色は劍身が劍尖部とその下部の袋状部からなり両者が中間突起部によつて分たれてゐる点である。この特殊な劍身は

同じく熱河地方から出る波形剣身の銅劍とか銅鉞^⑦と関連を持ってゐると思はれるが武器としてより効果的な形式である。

韓国銅劍の劍身に見られる挟り込みはこの満洲式銅劍の袋部入り込みの所謂不全器官であることは間違いないのであるから形式上この挟り込みが原形に近い程古式といふわけになる。韓国銅劍にも満洲式銅劍に近い形をもった例が出るのは周知の通りであるが『古文化綜鑑』第一巻図版三六、第一六七号劍などは比較的本

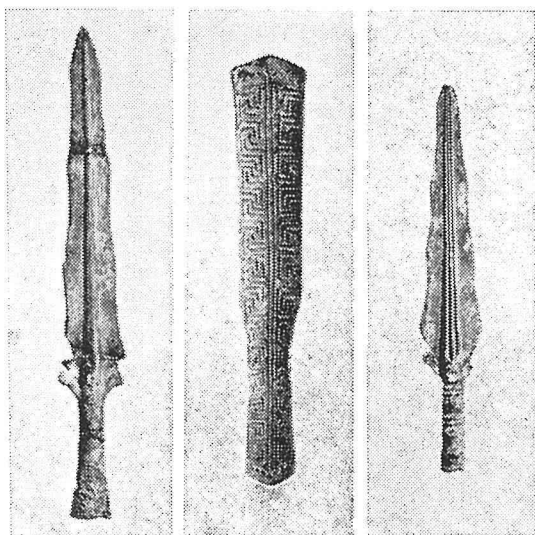


図3 内 蒙 古 出 土 銅 劍 ・ 銅 鉞 ・ 鞘

来の伝統を保つてゐると云へる。我が襄陽出土劍はこういった古式劍と劍身が非常に狭くなり挟り込みが一種の裝飾化した新式劍との中間形式に該当すると云へるが而しこれは形式上だけの話しで各個例についての実年代に当てはまるのではない。それはともかく古式にあつてはこの挟り込みが鏃で削られて成形したものであるが裝飾化した例にあつては刃部とこの挟り込み部との境界が刃部、稜部共に綺麗な突起となつて居りこれは鏃でなく初めから筈による鑄造であること明白である。我々は未だこうした挟り込みのある鎔范を發見してゐないが發見それ自体が稀少であるから現在迄の実例を以て云々することは出来ない。私は鎔范に挟り込みの彫られた例が将来必ず出てくると思ふのである。あの綺麗な、すべすべと削られたやうな挟り込みが白銅の劍身の上にちかに出來るとは思はれない。結局初めは鏃^⑧を使って満洲式銅劍に近い挟り込みを作つたのであるが途中からそれを鑄型に彫つて一種の裝飾物となして居るのであつてこゝいふ式にも刃を鋭くするために鏃仕上げをしてはゐるがそれはごく僅かでそれも磨きをかけて鏃痕をなくす傾向が強くなつてゐる。そういふ点から見ても鏃痕がそのまゝ刃部と、心部に残つてゐる襄陽劍は比較的古式の伝統を保持してゐると云へるのである。

尚餘談であるが韓国の磨製石劍が細形銅劍を模せることは定説

となつて居りそれについては有光教一博士の『朝鮮磨製石劍の研究』なる詳細な研究が出版されてゐることではあるが、私はどうも細形銅劍と石劍が形態の上で差異を見せて居り、石劍は寧ろ『内蒙古長城地帯』図版二七に載せられたやうな柄・身一鑄の扁平短劍に繋がるべきものではなからうかと思ふのである。そして所謂二段柄石劍は漢式劍をさへ想定させるのである。私の最大の疑問は銅劍に於て最後迄忠実に維持された「抉りこみ」が何故儀器である石劍に於ては初めから無視されてゐるかといふことである。これについては改めて稿を作つてみたいと思ふのでここではこれ以上ふれないことにする。

又細文鏡についても私は韓国細文鏡の祖型が前記十二台管子出土の幾何学文多鈕鏡であり、この祖型からの第一次倣製鏡が韓国細文鏡中の粗文式鏡、これから出発した第二次鏡が今見るやうな所謂精文式鏡であると説いたことがある。⑨そしてその祖型たる十二台管子出土多鈕鏡（第三号墳）の鏡背文に見られる乙字状文は戦国式銅鏡に現はれる Interlocked Ts 文の変形に違ひなく更にそれが韓国粗文鏡の雷光形ジグザグ文となり段々と鋸齒文になつて行つたと思はれるのである。こういった系図上から見ると、伝平南孟山出土の細文鏡範（『古文化綜鑑』第一巻図版四四）は未だ古式の伝統を持つて居ると云へるし我が襄陽鏡はずつと新しい

ものになるのである。こうなると襄陽の鏡と劍は銅劍は古式の伝統を残してゐるが鏡は發達せる形式のものであり「鏡銓劍時代」の後期に属するものと云へよう。恐らく前漢末から後漢初にかけての時期だと推測される。

五

従来 韓国青銅器発見例は北では平城附近と南では慶州附近に集中してこの二地域が自づから韓国青銅器の二大中心地となり、その外の地域は殆ど無視されて来た感があるが全南靈岩附近でも鏡劍類と共に近年一群の鎔范が出て居り⑩又京畿道龍仁郡でも鎔范類が発見されてその遺蹟の分布が拡大すると共に韓国内での青銅器鑄造は普遍的なものであったと認められるやうになつた。又江原道の北に続く咸鏡道地方について見ても『考古民俗』六三年一号は次のごとき青銅器発見遺蹟をのせてゐる。⑪

咸北

銅劍一

一九五三年

咸南

銅劍、銅銓、銅戈、

新倉郡下細洞里

鈴具各一

五八年

同郡土城里⑬

銅劍一

解放前

洪原郡雲浦里 銅製劍把頭飾一 五八年

退潮郡松海里 銅戈一 六〇年

咸州郡テソングリ 銅劍柄・銅刀子各一¹⁴ 五二年

〃 銅戈二¹⁵ 解放前

興南市ホサング洞 銅劍二 五三年、五八年

永興郡所羅里土城内 銅製劍把頭飾一、車輿具類、鉄製武

器類、土器 五六年

仁興郡 銅劍類

以上の如き青銅器発見遺蹟は咸北の、鍾城郡を除いては咸鏡南道南部海岸地帯に集中して居り、これが今回の発見を含めての江原道北部海岸地域と繋がることは略間違いないと思はれ、山脈を越えて東海岸群とも云ふべき銅劍文化の存在が明らかになったのである。そしてこの銅劍銅鉞文化の発生を衛滿朝鮮と結び付けるのは妥当であるかに見える。¹⁶

六

以上 襄陽郡出土の銅劍・細文鏡を紹介し、ついでに二三関連した問題について私見を略述した。私は銅質の悪い銅劍のみが韓国産でありそれ以外の白銅質劍は外国産であるとする見方に賛成出来ない。それは舶来品を尊敬する潜在的な先入観によるのであ

って細形銅劍類の場合それが中国製品でないとし又韓国製品でもないとするれば其産地は一体どこになるであらうか、韓国の細形銅劍とか細文鏡の祖型が熱河・遼寧の地の所謂滿洲式銅劍に求められたことは上述の通りである。而し彼の地では韓国式の白銅質細形銅劍は作ってゐないのであって滿洲式銅劍も細文鏡も韓国国内で發展、変化形式を見せてゐるのである。私なりの理論を言つて見れば銅劍・銅鉞・細文鏡人は滿洲から西北朝鮮に移来してここでそれを韓国式劍・鏡に發展、変化させて行つたのである。白銅質の精製品が多量に作られ始めたのは秦浪郡設置による漢人の移住と何らかの関連があるのかも知れないが原料入手の問題と関係があるのかも知れない。何れにしろ銅劍文化の伝播と波及(国内)は衛滿朝鮮人と密接に結びあつてゐると考へられる。鉄劍を使ふやうになつてからも銅劍は長い間彼等の出自を示す誇らしき象徴であつたかに見える。

(一九六六年十月二日)

① 沢俊一「鎔范出土の二遺蹟」『考古学』八卷四号、一九三七年。

② 梅原末治「朝鮮出土銅劍銅鉞の新資料」『人類学雑誌』四八卷四号、一九三三年。

③ この点については、梅原博士の既に指摘する所である。梅原末治「多鈕細文鏡考察上の新資料」『歴史と地理』二十九卷一号一九三三年。

- ④ 「南朝鮮に於ける漢代の遺蹟」『大正十一年度古蹟調査報告』第二册 本文五〇―五一頁図版第二八。
- ⑤ 拙稿「十二台營子の青銅短劍墓」(韓文)『歴史學報』十六輯、一九六一年十二月刊。
- ⑥ 鄭燦永「細形銅劍の形態と其変遷」(韓文)『文化遺産』一九六二年三月号。
- ⑦ これは『内蒙古出土文物選集』北京一九六三年によった。
- ⑧ 尚蘇聯沿海州マイへで細形銅劍と伴出した鍔は小さなブレイド形の石製であった。註⑥論文三五頁挿図1参照。
- ⑨ 註⑤参照、及び拙稿「Bronze Mirrors from Shih-eh T'ai Ying-tzu, Liaoning', *Arhus Asiae*, vol. XXVI, 3/4 (1963)
- ⑩ これは出所不明で金良全氏所蔵品であるが未だ報告未出であつて銅戈鍔二個のみが『古文化』第一輯(一九六二年五月)所収の同氏「再

考を要する磨製石劍の形式分類と祖形考定の問題」(韓文)の図版三に出されてゐる。

⑪ これは龍仁郡蔡賢面旺山里から発見されて國立博物館に齎らされたものであるが筆者の場合と同じく発見地点そのものは不明に終つたといふことである。

⑫ 田疇農「咸南新倉部下細洞里古朝鮮遺物」(韓文)『考古民俗』六一―一、四六頁。

⑬ これは従来北青郡青海面土城里出土品と伝えられた銅劍でありその後行政区域名が變つたものと見える。

⑭ これは李進熙「戰後朝鮮考古學の發達」『考古學雜誌』四五卷一號、一九五九年(所載)同一。

⑮ 『朝鮮古文化綜鑑』第一卷、図版三四所収

⑯ 都宥浩「真番と沃沮の位置」(韓文)『文化遺産』一九六二年四月号。

(ソウル大学教授)